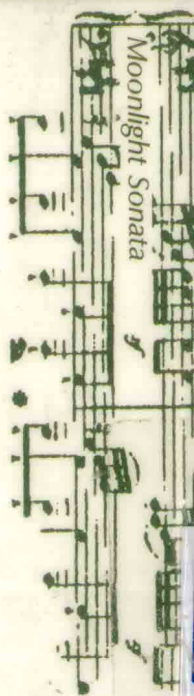


月光の夏

Tsune-yuki Mohri

毛利恒之

汐文社



著者紹介

作家・脚本家。一九三三年、福岡県大牟田市生まれ。熊本大学法文学部卒。NHK契約ライターを経て、フリー。日本放送作家協会理事、日本ペンクラブ、日本脚本家連盟会員。文部省社会教育審議会委員・専門委員などを歴任。

一九六四年、テレビドラマ脚本『十八年目の召集』で第一回久保田万太郎賞を寺山修司と同時受賞。社会派ドラマ、報道ドキュメンタリーの作家として知られる。

戦争犯罪と戦後責任をテーマとする三部作で『マーサ』『十八年目の召集』につづく『射殺』は長編小説として発表した。文部省芸術祭奨励賞、総理大臣賞など受賞作品が多い。著書に『夢にむかって飛べ』宇宙飛行士エリソン・オニツカ物語（講談社）などがある。

月光の夏

一九九三年四月一日 第一刷発行
四月十日 第二刷発行

著者——毛利恒之（もうりつねゆき）

発行者——吉元尊則

発行所——株式会社 汐文社

東京都文京区本郷1-26-10 〒113
電話 〇三（三八一五）八四二一（代表）

製版所——情報写植センター

印刷・製本所——（株）飛来社

装幀——コガワ・ミチヒロ

©1993 Tsuneyuki Mohri. Printed in Japan
ISBN-8113-0148-X C0093
乱丁・落丁本はお取り替えます。

光の夏

毛利恒之



目次

プロローグ	あの遠い夏の日に……………	5
第一章	訣別の奏鳴曲……………	9
第二章	特攻日記の謎……………	53
第三章	ピアノは知っている……………	107
第四章	南溟 なんめい の空に……………	167
エピローグ	愛と哀しみの微笑……………	221
あとがき		225

プロローグ あの遠い夏の日

ピアノの白い鍵盤のうえに、小さな指が軽やかにおどり、はずむ。小学生とは思えぬ巧みさで、少女がひたむきに『乙女の祈り』を弾く。

ステージでの演奏を聴きながら、吉岡公子は、いまの子たちは幸せだと思う。平和の世に生き、思うままにピアノが弾ける。五十数年も前、自分が少女のころは、弾きたくても身近かにはオルガンさえなかった。

ひとしきり拍手がわいて、鳥栖とす小学校の秋の音楽発表会は終わった。生徒たちや母親たちが連れだって、会場の体育館から帰っていく。

かつてこの学校で教え、ピアノを弾いた公子は、発表会に毎年、来賓として招かれた。会が終わったあと、ひとり残って、体育館のフロアの片隅に置かれている、いまは使われなくなった古いグランドピアノにふれ、青春の日の思い出を残す弦げの音を懐かしむ。

そのピアノは、身をひそめるようにして、うつすらとはこりをかぶっていた。子どもたちがドッジボールをぶつけたりして、あちこち傷ついている。公子は鍵盤にふれてみる。音程が狂っている。叩くと戻らないキーもある。ペダルを踏むと、悲鳴のような軋きしる音がした。

年老いたピアノが痛ましく、愛しくさえ公子は感じる。

生徒たちによく弾いて聴かせた『故郷の廃家』を弾いてみる。それを聞きつけて、川上教頭が寄ってきた。

「音が駄目でしよう、吉岡先生」

公子は微笑を返す。

「いいんです。弾いてると、いろんな思い出がね……」

「そうですか。これも、廃棄処分になりましたね」

弾く手が止まった。

「廃棄？」

「使わなくなつて七年になるんです。支えている脚もがたがたですしね、もし生徒が上にあがつたりしたら危ないでしょう。置き場所に困るんで、近いうちに捨てることになったんです」

「捨てる……!？」

公子は絶句した。老いて要らなくなつたものは捨てられる……。それだけではない、愛惜の思いが、痛みとなつて胸を衝いた。

「そんな……」

「六十年の歴史があることは聞きました。惜しいんですがね」

「教頭先生。捨てるんですしたら、このピアノ、私にいただけませんか。お願いします」

「え？　でも、使い物にはなりませんよ」

「置き場がなくて、私がこの下に寝ることになってもいいの。これには大事な思い出があるんです」

「昔のことはわかりませんが……。先生、なにか……？」

公子はピアノの鍵盤をなでた。瞑目すると、遠い夏の日の思い出が鮮やかによみがえり、熱いものがたちまち胸を満たした。顔をあげたとき、目に涙があふれそうになっていた。

教頭が驚いた。

「先生……？」

「特攻隊のひとつがね……」

公子は話そうとしたが、声がつまり、つづかなかった。

「特攻隊!?　あの、戦争中の……？」

公子はうなずいた。涙がこぼれ落ちた。

「吉岡先生……。聞かせてください」

教頭は真剣な目を向けた。

四十五年近くも前の戦争中の出来事について話すことが、のちに反響を呼んで波紋をひろげ、公子にとって不思議というよりほかない展開することになろうとは、このとき、夢に

も思わぬことであつた。

第一章 訣別の奏鳴曲^{ソナタ}

1

筑紫平野は初冬を迎え、晴れた朝は霜が白く降りるようになった。

この朝、吉岡公子は、出勤する夫の征爾^{せいじ}より先に家を出て、鳥栖小学校へ向かった。

音楽発表会のおりに、公子が教頭に話した、古いピアノにまつわる思い出が、校長に伝えられ、教職員の間で話題をひろげた。みんなで公子の話を聞きたいということになり、ぜひにと求められて、生徒たちのまえて話をするようになった。公子には思いがけないことである。

一九八九年（平成元年）十二月四日。全校朝会で生徒たちは体育館に集まった。

正面ステージにむかって左の隅のフロアに、古いピアノが置かれている。

このピアノは、昭和五年、鳥栖町婦人会の母親たちが「子どもたちに美しい音楽を」と金^か

錢を出し合い、ドイツに注文して取り寄せ、寄贈したフツペル製のグランドピアノである。備品も含めて、当時の金でおよそ五千円。家が数軒建つといわれたほど高価なものだったが、すでに半世紀をへて老朽化した。代わりの新しいピアノがはいって以後、使われなくなり、打ち捨てられたように体育館の片隅ではこりをかぶっていた。処分される寸前、公子がこのピアノの思い出を話したことから、捨てるのはひとまず保留になった。

この日、古いピアノは拭きあげられて、テレビ撮影のためにライトがあてられていた。市政記者クラブへの広報で知った、新聞やテレビの記者たちが取材にきている。KHC九州放送のテレビ報道記者、三橋朋子^{みつはしともこ}は福岡の本社からかけつけた。

公子は、校長の紹介をうけて照明された演壇に立つ。ふくよかで、六十三歳には見えないつややかな面^{おもて}に微笑^{ほほえ}みたたえて、生徒たちと朝の挨拶を交わす。

「みなさん、お早うございます」

「おはようございまーす」

報道陣のカメラのフラッシュがきらめく。いつにないことで、子どもたちはざわめき、落ち着きがない。公子はあらかじめ、西島校長に、「もし生徒たちが話の間でざわつくようだったら、話を切り上げていただいても結構です」といわれていた。四十五年もむかしの話を、いまの子たちがよく聞いてくれるかどうか。公子は心配だった。

まず、子どもたちに問いかける。

「みなさんは、戦争というものを知っていますか」

「ハ―イ」

生徒たちの陽気で無邪気な声が体育館いっぱいにひろがる。

「知っていますね。でも、テレビゲームやアニメの戦争ではありませんよ。ひとが死ぬ、ほんとうの戦争です」

生徒たちがひとしきりざわめき、やがて静まった。

「私は、戦争というと、まず思い出すことがふたつあります。ひとつは、みなさんも知っているでしょう、上野動物園のゾウさんが、戦争の終りごろに、餌を与えられないで、ひもじい思いをして死んでいったという話。知っていますね」

「ハ―イ」

「知つとる！」

手を上げる子もいる。

「もうひとつは、そこにある、古いグランドピアノのことです」

指さしたピアノに、生徒たちの視線が集まる。

「このピアノは、この学校に来て六十年。私と同じように、年老いてしまいました。でも、あの、戦争中の出来事を、きつと、覚えているに違いありません。私にも、忘れられないことなのです。」

お話はおよそ四十五年前のことです。

日本軍がハワイ・真珠湾攻撃で始めた戦争の火は、アジアの国々に広がりました。三年後には、日本軍があちこちで敗れて、九州の南の沖縄に、アメリカ軍が上陸しました。日本の国が滅びるかもしれない、苦しい状況に追い込まれていたと時のことです。

国を護ろうと、沖縄を取り巻くアメリカの軍艦めがけて、特攻隊が九州の基地からも飛びたっていました。

特攻隊というのは、わかりますか。爆弾を積んだ飛行機で飛んでいって、自分の身体ごと、敵艦にぶつかっていくのです。体当たりをするのです。敵艦を沈めるために死にいくのです。生きては帰れません……」

思い出は、太平洋戦争末期の一九四五年（昭和二十年）にさかのぼる。五月も末、季節は初夏を迎えていた。

すでに日本の敗色は濃く、本土の街々は連日、米軍機の空襲にさらされていた。

三月、鳥栖から遠くない大刀洗陸軍飛行場近くの村で、集団下校中、森のなかに待避した学童三十一名が、超重爆撃機B 29が投下した爆弾の直撃を受けて爆死した。

四月、沖縄に優勢な米軍が上陸した。鉄の暴風ともいわれる熾烈な戦闘は、緑の島を焦土と化し、敗退した守備の日本軍と住民は全滅に追い込まれていた。

戦局は最悪の事態となり、劣勢を挽回し米軍の本土侵攻を阻む策として、沖縄水域の米軍艦船に対し、陸海軍機による体当たりの特攻がつけられていた。九州の基地からも、若い特攻隊員たちが、連日、爆弾を抱いた機で出撃していった。五月下旬には、壊滅的な状況となった沖縄へ「義烈空挺隊」が強行突入し、全員が壮烈な死を遂げた。

そのころ、公子は、鳥栖国民学校で五年二組を教えていた。教師といっても、まだ高等女学校をおえたばかりの、お下げ髪をリボンで結んだ十八歳の「代用教員」である。男たちは兵隊にとられ、人手不足だった。

その日、午後の授業中に、公子は、校長室に急いでくるように呼ばれた。

（なにごとだろう!?）

急いで生徒たちに空襲警報が発令されたときの注意を言い聞かせて、公子は小走りで校長室へ向かった。

校長室にはいつて、思わず目をみはった。校長のかたわらに、ふたりの若者が立っていた。ともに、丸刈り頭の二十一、二歳。茶色の飛行服に白いマフラー。左腕に日の丸の縫い取り。飛行帽を手にした、ふたりの鋭い真摯な目に見つめられて、公子は声を失った。

「三輪先生、おふたりのお話を聞いてくんさい」

校長が公子にいった。彼らは公子にむかつて挙手の礼をした。

「自分たちは三田川から来ました。目達原基地の特攻隊のものです」

公子は息をのんだ。

「あす、発ちます。時間がありません。お願いであります。ピアノを弾かせてください。こいつは上野の音楽学校のピアノ科の学生だったんです」

涼やかなまなざしの明るい活発な感じの隊員が、長身のやや神経質な面ながの隊員を紹介した。長身の隊員はうなずき目礼した。

「死ぬまえに一度、思いつきり、ピアノを弾かせてください」

公子は、言いようのない衝撃を受けて、胸がつまった。

公子はピアノの係だった。鍵をあずかり、それにひもを通していつも首にかけ、胸元に入っていた。深夜でも空襲の警報が出ると、学校に駆けつけて、近くの番所川からバケツに水を汲み、いくつもピアノのまわりに置いて火に備えた。幾夜、暗闇のなかで恐怖に耐えてきたことか。公子は、死んでもピアノを燃やしてはならない、と教頭から言い渡されていた。

朝早く学校にくると、いつも、ピアノを拭きながら「おはよう」と声をかけ、「まず発声練習ね、声が出るかしら」といちばん好きな曲を弾くことから公子の一日は始まった。

ピアノにふれることは、公子にとってよろこびだった。幼いとき、ミッシヨンの火曜学校で金髪のイギリス人シスターが弾くオルガンの音色の美しさに心を奪われた。鳥栖小学校に入学して接したピアノが、その前の年にはいったばかりのフツベルのグラントピアノだった。初めて聞くピアノの音色は、公子の心をとらえて離さなかった。それが、のちに音楽を教え

ることにつながっている。

ふたりの隊員たちは、特攻出撃を間近にひかえて、グランドピアノを探しまわったという。おおかたの学校にはオルガンしかなかった。めずらしく鳥栖の国民学校にグランドピアノがある。聞いて、彼らは三田川から十二、三キロの道のりを長崎本線の線路づたいに走るようにしてやってきたのだった。

ピアノリストになることを夢見て学びつづけてきた青年にとって、リサイタルの一度もひらかず死ななければならぬとは……。死ぬに死にきれない、無念なことであろう。今生こんじょうの訣別に思い切りピアノを弾きたい、という青年の思いが、公子は痛いほどわかる。

公子は音楽室にふたりを案内し、鍵を使ってピアノを開けた。

長身の隊員は椅子にかけると、両手の細い指を鍵盤に走らせた。音がはずみ、舞い、おどる。これまでピアノにふれることもできず、抑えにおさえてきた気持ち、音色とともに一気にほとばしり出ているように公子は感じた。

「先生、なにか楽譜はありませんか」

隊員にいわれて、公子はピアノ曲集をさしだした。

「いまベートーヴェンの『月光』を練習しています。この楽譜しかないのですが」
「では、『月光』を弾きましょう。先生、あなたの耳に残しておいてください」

隊員は楽譜を開いた。ピアノにむかい、姿勢をただすと、鍵盤に両手の指をそえる。呼吸